（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　大川玲子

本論文は、イスラームの啓典であるクルアーン（コーラン）のキターブ（書かれたもの）として側面に注目し、クルアーンの中にあらわされたさまざまな「キターブ」の用例を調べ、それぞれの解釈の発展を主要なクルアーン注釈書の中に探ったものである。

論文は序章と３章それに結語から構成される。序章では、「書くこと」や「書かれたもの」の神話化が古代オリエントにまで遡ることが指摘され、キターブの語根の持つ意味の構造が明らかにされる。また、本論文で使われた六人のクルアーン注釈家の時代的背景やそれぞれの注釈の特徴が述べられる。第１章第１節においては、語られた言葉として啓示されたクルアーンにおいて、先行する諸啓典がクルアーンとともにキターブとして、明確にとらえられていることの持つ意味を探っている。第３説では、クルアーンの中で「書くこと」と「書かれたもの」に関連した単語の用例が検討され、クルアーンには、地上的なキターブのほかに天上的なキターブが存在し、後者は運命の書と記録の書に分けられることが明らかにされる。第２章は本論文の中心的部分であり、第１章で検討されたクルアーンの該当箇所が、後生の注釈者によってどのように発展されてきたかが歴史的に綿密に跡付けられる。天上的な書物として、運命の書のほかに、天に存在するクルアーンの原本に概念も包括されるようになったことが指摘される。次に天使たちが人間の行動を記録するという「記録の書」に関する注釈を検討し、注釈家たちが、イスラム神学の主流である運命論とこの考えとをいかに調和させようと試みたかを明らかにする。最後の第３章では、クルアーンが、神の許にある原本から、直接にムハンマドに下ったのではなく、一度最下天に下って、それから、分割されてムハンマドに下されたという二段階降下論を取り上げ、注釈家がこのような理論を作り出した思想的背景について考察する。

本論文の主題となった中世のクルアーン注釈書は、膨大な数が存在するにもかかわらず、従来はクルアーン研究の参考として使われるだけで、主題として研究されることは少なかった。本論文は、「キターブ」（書かれたもの）という概念に絞って主要な注釈書を検討し、注釈家によるクルアーン解釈を主題として取り上げたという点では独自な研究であり、その意義は大きい。ただし、本論で取り上げられた注釈書は、代表的なものではあるが、膨大な注釈書文献のほんの一部にすぎない。また、本論文で扱われた問題は、注釈書以外でも神学書などでも扱われており、それらを利用することで問題のより深い理解が得られると思われる。しかし、本論文が、注釈書を利用してイスラム思想史を研究する上での今後の研究の基礎を提供したことに疑問はない。よって審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。